100th Anniversary

since1923

つなぐ、はじまる、その先へ

目次

序章

校歌 2
院長と基本理念 3
教育理念、教育目的、教育目標 4
ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシー
創立100周年に寄せて 8

第1章 学校のあゆみ

沿革 16
歴代養成所長・学院長・学校長 17
医学・看護教育・当校のあゆみ 18
校舎の変遷 38
設置に携わって 40

第2章 100周年記念式典

記念講演 42
記念式典・永年勤続講師表彰 48
記念事業 49

第3章 恩師の言葉

講師 52
教務主任・専任教員 56

第4章 学校生活の思い出

写真で綴る学校生活 66
卒業生 90
在校生 102

第5章 同窓会

同窓会のあゆみ 106
記念植樹・同窓会写真 108
同窓会会則 110

資料編

概況 112
学則 113
教育課程の変遷 120
卒業生・在校生数一覧 129
歴代教職員一覧 130
卒業生写真一覧 132
年表 165
講演会等一覧 176
掲載記事 177

編集後記

医学・看護教育・当校のあゆみ

Ⅰ. 医学知識・技術の発達

近代科学の祖元とみなされている1543年、アンドレアス・ヴェサリウスが「人体構造論、ファブリカ」を出版し、人体の解剖学的構造が広く知られるようになった。1628年、ウィリアム・ハーヴェイが血液は血管内を循環していると発表し、人体の機能解明に先鞭をつけ、1747年、アルブレヒト・ハラーは「生理学入門」を出版し、人体の機能（生理学）を探求する端緒となった。

17世紀、フランシス・シルヴィウスが始めた臨床講堂やベッドサイドで患者の症状、原因、治療について討論するという新しい形式の教育（臨床教育）は、18世紀になると、ヘルマン・ブールハーヴェによってさらに発展し、患者の状態を過去の学説や理論に捉われず患者の顔、呼吸、その乱れを観察し記録する方法を開始し、その講義録がラテン語で出版され、各国で翻訳されて出版された。

19世紀になると、肺・心臓血管系の病気についての体外からの診断（コルヴィザール、ラエンネック）、病気になるとどのような変化が人体内で起こっているか（細胞病理学、ウィルヒョー）、細菌感染症についての予防対策や病原菌の探求（コッホ）など、科学的知見が相次いで明らかにされた。

しかし、フローレンス・ナイチンゲールが、クリミア戦争（1853年～1856年）で輝かしい業績を挙げた時期、感染症（伝染病）については科学的にはまだ解明されていなかった。

イグナッツ・フィリップ・ゼンメルワイスが、「産褥熱の病因、概念、及び予防法」を刊行したのは1861年であった。死亡率の統計学的研究によって殺菌法antisepsisによって発症率を激減させることを証明したが、当時の医学界の権威たちはそれを認めようとはしなかった。

パスツールは、1861年にスープの腐敗は自然に起こるものではなく、原因は外から入り込んでくる微生物（細菌）にあるとし、1862年にクロード・ベルナールと共に、牛乳、ワイン、ビールの腐敗を防ぐため低温殺菌法を開発した。イギリスの外科医ジョゼフ・リスターは、殺菌法の原理を手術に応用し、敗血症の原因となる傷口の腐敗（化膿）を防止しようとした。その後、生体組織を障害する怖れがある化学的殺菌法から手術に使用する器具や衣服を熱湯か加熱蒸気で無菌化する方法へ進んだ。

ロベルト・コッホは、ペトリ皿（シャーレ）を発明し固体の寒天培地を考案し、細菌の純粋培養に成功した。そして純粋培養した菌で病原菌を特定できた。コッホはこの手法により、1876年に炭疽菌、1882年に結核菌、1884年にコレラ菌の分離に成功し、世界で初めて細菌によって病気が引き起こされることを証明した。

Ⅱ. ナイチンゲール *Florence Nightingale（1820年～1910年）*

19世紀、都市は、不衛生な状況が拡大してコレラやペストなど感染症の温床となった。まだ細菌学の概念がない時代、感染症の明確な原因がわからないまま恐れられていた。人間の病原菌は、1882年、コッホによって発見された結核菌が最初である。もちろんクリミア戦争当時、そしてナイチンゲールが活躍した時代には、感染症に対する予防や治療は、確実な根拠を示されないまま実施されていた。

クリミア戦争（1853年～1856年）は、ロシアがオスマントルコ帝国に宣戦したことに対し、イギリスとフランスおよびサルデーニャがオスマン帝国を支援して戦争となった。その間、フランス軍は約1万人の戦死者を出したが、その一方で伝染病と創傷感染による死者は8万人を超えていた。病室の悪臭がひどくなると「伝染性のガス」が発生したとして、空気の流通をよくし、悪臭の発生源である創傷の患部を切り取るなどの措置がとられた。

ナイチンゲールは、クリミア戦争中に看護師グループを率いて英軍がイスタンブール対岸に開いた陸軍野戦病院で負傷兵のケアを行った。軍人の死因を記録、分析するうちに、実は戦闘よりも伝染病による死者がはるかに多いことがわかった。1854年4月から2年間で、英軍病院で亡くなった約1万8千人のうち、伝染病が約8割、戦闘が1割、その他が1割との記録がある。

コレラや赤痢が蔓延していた英軍病院で傷病兵の看護にあたり、ナイチンゲールは、患者間の間隔を少なくとも1m開けること、病院の地下にいた傷兵隊の馬を移動させること、毎日水を流して下水溝を洗うこと、換気の徹底を図ること、便所の消毒を行なうことを要求し、ネズミ退治や寝具の交換、劣悪な衛生状態を改善した。その結果、ナイチンゲールが到着して6ヶ月で死亡率は42.7%から2.2%に下がり、英国内における死亡率と同等まで改善した。数多くの命を救う活躍をした。

ナイチンゲールは、クリミア戦争での体験から、兵士は戦場で死ぬのではなく、病院内で病気になって死んでいるという現実を知った。そのことに気づいた彼女は、病院・医療のあり方や公衆衛生のあり方にも発言した。院内感染を防ぐため国を挙げての改革が始まった（She saws thousands of soldiers die from infectious diseases rather than their wounds, prompting her to try and improve conditions. She developed revolutionary views about hygiene and sanitation, infection control, hand washing.）。

1820年に英国の裕福な家庭に生まれたフローレンス・ナイチンゲールは、幼い頃から医学に情熱を持っていた。女性が家にいるのが当たり前の社会で、彼女は性別の壁を打ち破った先駆者となった。ナイチンゲールは、今日のすべての人々の医療に利益をもたらし、忍耐しい慣習に挑戦し、歴史に名を残した活動家、社会改革者、統計学者、看護を専門的な職業とした先駆者であった（Her brilliant legacy that benefits everyone's medical care today, an activist, a social reformer, a statistician and a nurse who defied the stifling conventions and marked history.）。

引用文献

Alan Glasper: How Nightingale's concept for a school of nursing changed global nurse education, British Journal of Nursing, Vol 29 August 2020.

クリミア戦争中、ナイチンゲールがランプを持って、病室の患者を見まわっているところを見て、スケッチしたものである。人は、彼女を「ランプを持った貴婦人（the lady with the lamp）」と呼んだ。
1855年2月24日、ロンドンニュース（岡山大学太田武夫名誉教授提供）

Ⅲ. ナイチンゲールの看護教育

1856年、ナイチンゲールは戦地から帰還すると、ヴィクトリア女王やイギリス国民からヒロインとして歓呼の声をあげて迎えられた。しかし、戦地に同行していた看護師11人がクリミアでの感染症で死亡し、彼女自身、クリミア熱（ブルセラ病と考えられる、Young, 2005年）の後遺症で悩み、あるいは戦地での体験からpost-traumatic stress disorder（PTSD）により60歳頃まで体調がすぐれなかった。しかし、それにもかかわらず、看護など医療に関して様々な角度から200以上のレポート、パンフレット、本を執筆し、数千通の手紙を書いている。

ナイチンゲールを賛美する声はイギリス全土に広がり、4万5,000英ポンド（2020年時570万英ポンドに相当）の資金が集まった。ナイチンゲールは、最初、軍隊の医療を近代化することに資金を使おうと考えていたが、ロンドンの聖トマス病院が改築されることが決定されるや、同じ敷地内にこの資金を使って看護学校を開設することを決意した。

1860年、聖トマス病院の隣上に聖トマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校（The Nightingale Training School for Nurses）を、そして隣接して"home"を建設した。ナイチンゲールの看護師養成学校は、看護と医療を変革するナイチンゲールのキャンペーンの一環として設立された。ナイチンゲールの目的は、看護師養成学校で系統的に科学的に訓練

写真で綴る学校生活

看護体験

平成28年　オープンスクール　手浴の様子

看護体験　沐浴の様子

平成7年　1日看護体験入学

入学試験

昭和42年度　入学試験場

入学

平成16年　第52回生　入学式

平成21年　第57回生　入学後、桜の下で

令和5年　第71回生　新入生体験学習（美容地区）

体育祭

平成19年　第53回生　優勝

平成20年　第54回生　お揃いのジャージ、努力の上に花が咲く

昭和2年頃　体育祭

昭和39年頃　準備体操

昭和55年頃

平成21年頃　第57回生　クラスお揃　長縄

令和元年　第65回生　入文字

戴帽式

昭和29年　第2回生

昭和54年　第27回生　倉敷文化センター

芹沢銈介氏作のナイチンゲールステンドグラス
（大原記念ホール）

平成17年　第53回生

キャンドルサービス

令和3年　第69回生

昭和43年　第16回生

昭和49年　第22回生　戴帽式後の祝賀会
浅野仁郎学院長と共に

戴帽式後の宴席の華い

講義風景

昭和28年頃

昭和43年頃

看護学実習　補助教室

平成9年　第45回生　遠藤克郎先生による脳神経系の講義

平成7年　第43回生
【心理学】
三谷真一先生による講義
～ペットを解剖することによる
リラクゼーションの実体～

「人体の成り立ちと生活」身体の不調についてプレゼンテーション

看護婦寄宿舎／学生寮

看護婦寄宿舎　大正13年完成

昭和18年頃　体操

学生寮と看護婦寄宿舎の間にあったラウンジ

昭和18年頃　洗濯

昭和28年頃　和裁

平成13年頃　寮の生活

鉄製二段の寮で起床し、朝礼、ナイチンゲール誓詞を唱えた後、学校していた。

昭和18年頃　卓球

平成14年　学生寮開館　共同生活は礼節や協調性を身につける教育の場でもあった。

倉敷中央病院看護婦養成所生寮の碑

校舎（昭和43年～令和2年）

正面玄関

玄関

病院敷地入口　学校のプレート

1階　廊下

1階　学生ホール(学生の交流スペース)

2階　食堂室

3階　図書室

1階　エントランス

教室（2階3年生、3階1・2年生）

学校からみた病院